10cm

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１０ｃｍ

【Ｎコード】
Ｎ４９４９Ｆ

【作者名】
悲劇のＭ

【あらすじ】
慣れぬ連載。ツンデ霊。更新への不安。様々なプレッシャーが重くのしかかりますが、あたたかい目で見守ってやって下さい。週一更新を目指します。

携帯電話って便利ですよね（前書き）

筆者によるツンデレ妄想劇のはじまりはじまり～

携帯電話って便利ですよね

一人の少年が制服を着込み、鞄を背負って暗い夜道を歩いていました。彼は高校の１年生で、恋に勉強に遊びに、そんな青春を人並みに全うしてきた人間です。将来なんてまだ先のこと。今はおもいっきし楽しんでも誰にも咎められない時期なのでした。

しかし、それなりに楽しい毎日にも飽きてきた彼です。いつもとは違った刺激を欲しがってたりするのでした。隊長、伏線を張っておきました。

夏だというのに肌寒い風が頬を撫で、美しい満月が優しく彼を照らします。辺りに民家などはありません。小さな道路でした。

少年は携帯電話を開いていました。掌程に小さい携帯電話で動画などが見られるようになったご時勢、彼もその娯楽を楽しんでいました。

実は彼、最近妙な噂を耳にしたのです。呪いの動画の噂です。隊長、これより伏線の回収作業を行います。

呪いの動画というのはお馴染み呪いのビデオをインターネットにのっけた物で、ネットサーフィンなどをしていると稀に見つかる事がある動画だそうです。それを開いてしまうと画面が真っ赤に染まり、中から髪の長い貞子さんという女性が現れ、見た人を呪い殺すといいます。恐ろしい事この上ありません。しかし怖いもの見たいというのは人間の情、彼もまたその一人でした。携帯電話のインターネット機能で呪いの動画を探すのに励んでいましたが、案の定といいますか、成果は無し。少年は知っています。こういった都市伝説というのは大部分が嘘っぱちだということを。一欠片の真実というのを信じてないわけではありませんが。

暫く歩いていると、少年が「おっ」と声をあげました。画面には『呪いの動画』の文字。とうとう見つけてしまったようです。ですが、こういった事は以前にも何回かありました。すべて『ｍ９（＾

Д^）プギャー』が大きく画面を占領しただけです。どうせまた同じだろう、といった気持ちでボタンを押しました。すると、明るい画面が急に暗くなりました。いつもならここで『ｍ９（^Д^）プギャー』と出るのですが今回はありません。少年が緊張と楽しみの混じった表情で画面を見つめます。すると、画面はジワジワと赤くなっていきました。気づけばもう真っ赤です。恐怖心が全身を支配した少年は、早く消そう、早く消そうと思っていましたが、指が動きません。こまったぞ。

やがて、真っ赤な画面に黒い点がポツンと浮かびました。もう汗が玉の雫となって頬を伝うほど焦っています。この汗は熱帯夜のせいだ、呪いの動画なんてあるわけないじゃないか、と自分に言い聞かせる少年ですが――

黒い点が大きくなり、やがて、ずんずんと画面を越えて何かが出てきました。長い髪を無造作に垂らして手で這って来ます。きます、きっときます。全体像を表したそれは、以前何かで見た『貞子さん』そのものでした。しかし、偶然、いや、必然というべきか、何かで見た貞子さんとはあるところが違いました。そのおかげといいましょうか、少年から恐怖心が薄れてゆきました。何が違うのかって？貞子さんの言葉に注目。

「わっ、何コレ？　なんであんたこんなに大きいの？」

「いや、君が小さいんだって」

貞子さんは辺りを見回しました。目に映るのは天突く電柱に、怪物と見まがう犬。そして眼前には征服を着込んだ大男。

「もしかして、あたしが小さいの？」

「うん」貞子さんの問いに首を縦に振る少年。そして続けます。

「ところでその体勢辛くない？」

貞子さんは上半身を携帯電話から出したままでした。

目測１０ｃｍといったところか、少年は心の中で呟きました。

正体は大悪霊

「ところで、君が貞子さん？」
少年が問いかける先には長い黒髪を無造作に垂らした少女がいました。髪の毛の間から覗く瞳は美しい黒目が印象的で、目鼻立ち整ったなかなかの美少女でした。安っぽいワンピースを見事に着こなしています。歳の頃１０代の半ば程と見受けられます。彼女の正体は呪いのビデオで有名な貞子さん。ところがどっこい彼女の身長は１０ｃｍ、今は少年の掌で立っています。体温が冷たく、ひやりとした感覚が少年の掌を襲いました。
「そうだけど、何であたしこんなに小さいの？」
怒り交じりに言う貞子さん。少年には多分これかな、と心当たりがありました。思ったことを苦笑いしながら言ってみます。
「僕が携帯電話で呪いのビデオを見たからかな」
「携帯……電話？」
首を傾げる貞子さん。少年はズボンのポケットから先ほどしまった携帯電話を出しました。
「これが携帯電話？」
「そう、どこでも電話が出来る機械なんだけど、知らないの？」
少年が説明したのと同時に、貞子さんは怒りに任せたような口調で叫びました。
「そんな小さい機械であたしを呼び出したらあたし自身小さくなるに決まってるじゃない！　頭使いなさいよ、バカ！」
体の小ささ故、声も小さいです。今の大声で普通に聞こえるくらいです。
少年は貞子さんの言動に少し引っかかりました。呼び出す？
「あの、呼び出すってどういうこと？」
「そんな事も知らないで私を呼び出したの？　いい、呪いのビデオを見たら私が現れるの。その度に井戸に出張命令が来るからまいっ

てるけど、今はそんなことどうでもいいわね。それで私が現れたらその場の人全員を呪い殺すの。呪い殺すまで井戸に帰れないから。で、あんたを呪い殺して井戸に帰ろうと思ったらこの小さい体じゃない。これじゃ霊力とかも全然足りなくて呪い殺すなんて到底出来ないわ。どうしてくれるの」

目元を吊り上げながら凄みのある声で言っても、掌の上じゃおかしささえ感じられます。少年は笑いを堪えようと口元を引きつらせましたが

「何笑ってんのよ、あんたの責任よ。こうなったら、あんたを呪い殺せるまで憑依してやるんだから」

一笑した少年を咎め、憑依宣言しました。さぁ大変だ。ですが少年にとってはそれ程の事でもないようです。

「いいよ、いくらでも。それと、僕にはちゃんとした祐樹っていう名前がある。それで呼んでくれよ」

祐樹君の気抜けた態度に怒りを覚える貞子さんですが、妙な親しみを持たれた為か、口元が少しばかりはにかんでいました。しかし、さっきの様に目を釣りあがらせて厳しい口調で言いました。

「ふんっ、しょうがないわね。あたしに名前で呼ばれるだけ幸せと思いなさい」

そう言うと、貞子さんは祐樹君の胸ポケットに飛び乗って入り込みました。憑依完了。

「これが君の憑依ってやつか？」

呆れ顔で苦笑いする祐樹君。貞子さんは不満げに応えます。

「ここが丁度良いの。大体今の体じゃ憑依もろくに出来ないわ」

「まいいや、これからよろしく」

胸ポケットに幽霊を入れた祐樹君は、家へと歩き出すのでした。

ラブコメではヒロインの裸体をさらせ（前書き）

へへ、兄貴、実は挿絵を用意してるんですぜ（ＡＡを贈ってくれた友人のＫさん、ＴＨＡＮＫＳ）。

ラブコメではヒロインの裸体をさらせ

えっちらおっちら歩いて祐樹君は家に帰りました。郊外の閑静な住宅街にある彼の自宅は広くも無く狭くも無く、庭には何か植えたりするのに不自由しない大きさの花壇があります。彼はこの家で両親と暮らしています。

ノブを回すと、開きません。家には鍵がかかっていました。ズボンのポケットから鍵を取り出して開錠しました。

「ただいま」

案の定、『おかえり』の返事は返ってきませんでした。鞄を背負ったまま明かりの点いたリビングに行くと、コンビニ弁当がありました。傍には置手紙が。

~　急な仕事で出かけてます。夕食はレンジでチンして食べて下さい　母　~

いつもこんな感じです。

父親はいつも残業のサラリーマン、母親は芸能記者をやっています。お互い仕事を続けるという約束の結婚だったようで、この時間帯家には誰もいないことがよくあります。

レンジで夕食を温めなおし、早速パクつきました。一人で食べる保存剤たっぷりの和風ハンバーグは、どこか冷たい味がしました。あと３０秒くらい解凍しときゃよかったと思う祐樹君でした。

そんなことすぐに忘れようと、祐樹君は顔を下に向け、胸ポケットの貞子さんに話しかけました。

「貞子さんも食べる？　美味しいよ」

「幽霊はご飯食べたり出来ないの」

「そうなんだ、じゃあ一人で食べるね」

そして完食。貞子さんに対するすまない気持ちは少なからずあっ

た祐樹君ですが、空になった容器をゴミ箱に捨てました。
「お風呂入るけど、貞子さんも一緒に入る？」
半分冗談、否、１００％冗談です。
「バッ、バッカじゃないの？　何考えてんのよ！　幽霊は外気の汚れとか付かないからそんなの必要ないの」
面白くなってきた祐樹君。話を続けてみます。
「でもあったかいお湯は気持ちいいよ。先に入っていいからさ」
「ぜ、絶対覗かないでよ。覗いたらタダじゃおかないんだから」
ピョンッと胸ポケットから降り、膝の辺りでタンッとやると、見事着地成功。なかなかに器用です。そしてお風呂場へと駆けてゆきました。

お湯を張った洗面器に浸かりながら鼻歌を歌う貞子さん。汚れていなかろうが、彼女にとってもお湯は気持ちいいものです。濡れた髪の毛からは水がぽたぽたと流れ落ちます。その度に水面に波紋を広がらせていました。
「ふぁ～、久しぶりのお風呂、いい気持ち」
小さな声が風呂場に響きます。井戸の中には雨水が降ってくる程度、お湯なんて生きてる頃にしか体感してません。
そう、彼女にも人間の時代があったのです。誤って井戸に落ち死亡しました。あっけない死に方だった為に幽霊となり、呪いのビデオなるものを作って世に出まわしたました。そしてそのビデオを観た人の前に現れて呪い殺すのですが、それにも飽き、何であんなもの作ったんだろーな、とか思うようになった矢先です。携帯電話に呼び出されたのは。携帯電話という小型機械で出現したため体の大きさもミニチュアサイズ。呼び出した人を呪い殺す霊力も足りず、憑依と称して貞子さんを呼び出した人に付きまとうようになったのです。べ、別に1話で設定説明忘れたからここでしてるってわけじゃないんだからねっ！
そろそろ上がろうということでお湯からあがった貞子さん。小さ

い手ぬぐいが置いてあるところにトコトコと歩いて行くと、それで体を拭きました。自分の身長の何倍もある手ぬぐい故に拭きにくそうですが、体から全ての水気を落としました。と、その時でした――『ガララララ』音を立ててお風呂場の扉が開きました。そこには一人の少年が立っていました。

「貞子さん、替えの服がないから着てた服そのまま着けてね……ってあれ、貞子さん？」

祐樹君は首を振って見回しました。いません。下を見回しました。いました。

彼の瞳に映るは、濡れそぼった黒髪の中に浮かぶ小さな一転の曇りもない白磁のような肢体に、未成熟故にあからさまな膨らみのない、ただ流麗な曲線によって描かれる清冽の姿でした。

「……」

桃源郷に迷い込んだかの様な幻想に花咲かせる祐樹君の、意味のある沈黙でした。

「バカーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっっっっっ！！」

ラブコメではヒロインの裸体をさらせ（後書き）

自主規制

眠そうにしている寝起きの女の子の可愛さは１２０％

夏の朝でした。
東の空に昇った太陽は全てのものを照らします。それはある一軒家の二階にある部屋も例外なく照らしました。
部屋の中は六畳ほどの、決して広くない部屋でしたが、生活必要品は一通り揃っていました。勉強机の上には絵の無いケースに包まれた消しゴムや、百円で買えそうなシャープペンシルが散乱しています。
タンスの前のハンガーには男の子が着る、袖の短い夏用の白い制服が下げられていました。そして、ベッドで寝ているのがその制服の主の祐樹君です。
年の頃十代の半ばと見受けられる少年で、少し茶色がかった短い髪を寝癖で跳ねさせています。口を閉じ、鼻で寝息を立てていました。べ、別に容姿の設定を一話で忘れたから今書いてるってわけじゃないんだからねっ！！
太陽が少し動きました。窓に日差しが入り込み、偶然にも寝ている彼の顔に直撃しました。
祐樹君は重い瞼を半分程度開きました。枕元に置いてある黒いシックなデザインのデジタル時計を確認します。六時五十九分、そう告げていました。次の瞬間――
――ぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴ
時計にセットしていた目覚まし機能が連続して高いアラーム音を出しました。
『スパーン』祐樹君が時計の上に付いている突起を押し、音を止めました。
ベッドから半身を起こし、首を左右に振りました。これが彼の起床方です。
ふと、自分が寝ていたベッドの一隅に目を遣りました。少女が寝

ていました。
長い黒髪を無造作に垂らした少女でした。年の頃１０代の半ば程で、ロリコン共が見たら地の果てまで飛んでっちゃいそうな幼くて可愛い寝顔をしています。半開きの口でスースー寝息を立てていました。
彼女の正体は悪霊で有名な貞子さんですが、訳有りで１０ｃｍという小さな体になっていました。
そんな彼女を起こさないように、ゆっくりとベッドから降りる祐樹君。ハンガーに下げている制服に手を伸ばした時でした。
「う、ん、もう朝……？」
目をこすりながら、貞子さんが目を覚ましました。そして自分の寝ている場所に気づきます。祐樹君の方を向き直り、言いました。
「な、何もへんなことしてないでしょうね」
「するわけないだろ」
顔をしかめる祐樹君。しかし昨日の一件で彼の信用はガタ落ちしていたのでした。ピンと来ない方は前話参照。ってなぜとばしたし。
祐樹君は着ていた寝巻きのシャツのボタンを一つずつ外しました。あっという間に胸元がはだけます。
「ちょ、ちょっと、急に何する気よ！　変態！」
激しく動揺する貞子さん。両手で目を覆います。火照った赤い顔は夏の暑さのせいでしょうか。
「何って、制服に着替えるだけじゃないか」
平然と答える祐樹君。ですが、貞子さんの火照った顔はまだ冷めません。
「お、お、女の子がいる部屋で……よ、よくそんなこと出来るわね。少しは、つ、慎みなさいよ！！」
「何だ、恥ずかしいのか？」
「そうじゃなくて……と、とにかくあたしが目瞑ってる間に着替え済ませなさい」
「わかったよ」

着替えを始めました。青みがかった半袖の制服と、同じく制服のズボンを身に着けました。それが終わると、両目を手で覆い隠している――中指と薬指の間がちょっと開いているのはご愛嬌――貞子さんに言いました。

「終わったよ」

すると貞子さんは無言で制服の胸ポケットに飛び乗りました。霊力が足りない彼女の憑依です。

祐樹君は扉を開け、一階への階段を下りました。日光の入るリビングに入ると、テーブルにはラップに包まれていない朝食が用意されていました。

「おはよう、今日は早いわね」

声をかけたのは母親でした。エプロン姿が良く似合っています。昨日夜遅くから仕事に行っていたにも関わらず、明るい笑顔でした。そんな母親に、祐樹君も笑顔で返します。

「うん、おはよう」

テーブルに掛けました。向こう側には父親が座っていました。既にスーツを着込み、会社に行く用意は済んでいるようです。

「おはよう、祐樹」

「おはよう、父さん」

台所に立っている母親が振り向きました。

「二人とも早く食べちゃいなさい、片付けがあるんだから」

「「はーい」」

父子、声を揃えて言いました。

家族が集う、朝の風景。何者にも変えがたい、日常でした。

あれ？――祐樹君に疑問符が浮かびました。母さん達には貞子さんは見えないのかな、と。

まぁいいや、そんなこと。祐樹君はこんがり焼けたトーストを口に運びました

トーストに味噌汁という何とも不一致な朝食を食べ終えた後、祐

樹君は自室に行きました。目的は鞄をとることと、他にもありました。
「貞子さんの姿って僕以外に見えないの？」
自分の胸ポケットの方に向かって、視線を落とさずに言いました。
「一応ね。あの時一人だったでしょ。あのビデオを見た人しかあたしの声を聞いたり、姿を見たり出来ないの。仮に見えても、普通ならすぐにあたしに殺されちゃうけどね。今のこの身体じゃ無理だけど」
そうなんだ、と言いながら、持ちなれた鞄を手に取りました。そして背負います。中は教科書数冊しか入ってないのでかなり軽いです。
「ところで、学校にも憑いてくるの？」
「あ、当たり前でしょ。何？　悪い？」
「いや、悪くはないけど……」
苦笑いする祐樹君。階段を降り、靴を履きました。見えないんだったらいいか、と思いながら「いってきまーす」と言って、家を出ました。

待たせたな　幼馴染の　登場だ（前書き）

滑り込みセーフ！

待たせたな　幼馴染の　登場だ

「ちょっと、もっと速く歩きなさいよ」
電柱が無駄にたくさんある幅広の道を歩く祐樹君に、制服の胸ポケットに収まっている貞子さんが言いました。祐樹君は歩くのを一度止めて言いました。
「いいじゃん、まだ早いし。ゆっくり行こうよ」
「もう、しょうがないわね」
貞子さんが言うと同時に、再び歩き始めました。この時間帯は人通りも少ないので、好んで通る道でした。ですが、今の季節だと太陽の角度の関係で日差しがガンガン照りつけるというのが難点です。玉のような汗が祐樹君の頬を伝いました。貞子さんがカリカリするのもこの暑さが原因と見受けられます。
と、その時です。
「おっはよー、祐樹」
鈴のような透き通った声が聞こえたかと思うと、その声の主は祐樹君の目の前に現れました。
肩につくかつかないか程に短く切った髪は一本一本が美しく真っ直ぐで、つやつやと黒光りしています。目はぱっちりと大きく、宝石のような美しさを放っています。制服の白い夏服から覗く肢体は健康的に焼けていて、その少女が快活だということを連想させるのに十分な素材でした。
そんな美少女が目の前にいるにも関わらず、祐樹君は変なものでも見るような目つきです。歩きながら、祐樹君は言いました。
「朝からテンション高いんだよ、美代」
美代と呼ばれた少女は祐樹君の肩をポンポン叩きながら言います。
「朝はしゃきっとしなきゃ」
「はいはぃっと」
二人は歩を合わせて歩き出しました。

一之瀬美代、祐樹君の幼馴染で、小中高と同じ学校に通ってきました。家も近くにあり、幼い頃はよく一緒に遊んだりしました。そして女は強し、その頃は美代さんが優位だったのは二人も覚えてません。

時折くだらない話をしながら、二人は学校への道を歩きました。しかし、楽しそうにしている二人を見て非常に不愉快になっている幽霊がいるなんて、誰が予想してたでしょうか。えぇ、察しの通り、胸ポケットに収まっているあいつです。

待たせたな　幼馴染の　登場だ（後書き）

美代さん（筆者の嫁）

そんなに重要な回じゃないけど読み飛ばすなよお前ら（前書き）

最近非常に焦ってきています。必死に週一更新を頑張っているのですが、どうにも上手くいきません。今回の低クオリティはそれの現れなのかもしれません。

そんなに重要な回じゃないけど読み飛ばすなよお前ら

違うクラスの為に美代さんとは先ほど別れた祐樹君。一人自分の教室へ行き、その扉を開けました。

男子の集まりでは流行のゲームやＤＶＤなどの話が、女子の集まりでは誰が誰を好きかなどとスイーツ臭たっぷりな話がされています。そんな喧騒に包まれた教室の窓際最後列という最良のポジションに背負っているカバンを置いて座る祐樹君。無地のカーテンが朝のそよ風にはためき太陽の光が入ったり遮断されたりを繰り返す様は、妖精が踊っているかのようでした。涼しい涼風は、今が夏であることを忘れさせます。祐樹君は机の上にある自分の鞄を下げると、授業までの間机にうつぶせになろうとしました。しかし――

「ちょっと祐樹」

胸ポケットの貞子さんが見えない上目遣いでそれを制しました。だるそうに目を細める祐樹君に構わずに続けます。

「誰なのよ、さっきの女は」

「誰って……ただの幼馴染だよ」

「それだけじゃないでしょ。鼻の下伸ばしてデレデレしてたくせに」

「ち、違うって！」

貞子さんの言葉に思わず大声をあげる祐樹君。教室の所々から嘲笑が聞こえます。慌てて祐樹君は席を立ちました。

廊下に出ると、今の時間は人気の無い渡り廊下に出ました。

「だから、さっきのはただの幼馴染であって……」

「じゃ、じゃあ、あたしとその幼馴染と、どっちがいいの？」

ポケットの中でそんなことを聞きました。くぐもって聞こえます。いつもより紅くなっている頬に、位置の関係で祐樹君は気づきません。

「どっちって、それはどういう意味？」

わざとらしく首を傾げる祐樹君に、貞子さんは大声をあげました。

「お、女としてどっちがいいか聞いてるんでしょ！　察しなさいよ、バカ」
途中から声のトーンも下がります。祐樹君は驚いたように聞き返そうとしましたが、鳴り響くチャイムの音でやめました。教室まで走る途中、貞子さんに言います。
「授業中は静かにしててね」
「もう、祐樹ってば」
それだけ言って、胸ポケットに潜り込みました。急いで廊下を歩く生徒達の間を、祐樹君はただ走りました。ただただ走りました。

フラグ

幸いにも授業中、貞子さんはおとなしくしてくれました。そのおかげか、授業中は窓際で風にあたりながらぐっすりと眠ることができました。

鳥の歌、葉の囁き、夏の風。休み時間にも関わらず。授業中たっぷり寝たにも関わらず。睡魔は容赦なく祐樹君を襲います。思わず机に突っ伏してしまいました。そんな祐樹君に周りは気にする様子も無く、他愛の無い話が繰り広げられていました。いつもの休み時間はこんな調子で自然と終わるのですが、今日は少しいつもと違うようです。

ガラッ。教室の扉が勢いよく開けられました。

祐樹君が見やると、そこには一人の少女が立っていました。

肩につくかつかないか程に短く切った髪は一本一本が美しく真っ直ぐで、つやつやと黒光りしています。目はぱっちりと大きく、宝石のような美しさを放っています。制服の白い夏服から覗く肢体は健康的に焼けていて……って、何で貴様がここにいるのだ、一之瀬美代。良いタイミングとは言い難い状況です。しかし祐樹君はそんなこと思っていません。何で美代がここにいるんだ?それは地の文と大差無い心情です。

美代さんは祐樹君の席まで歩いていきました。歩を進める度に、それに同調するかのように紺のスカートがヒラヒラと揺れます。その右手には布に包まれた箱が。コレ、伏線ですよ。

「ごめん祐樹、朝渡すの忘れてた」

持っていた黄色い布に包まれた箱を祐樹君の机に置きました。そして言います。

「最近コンビニ弁当ばっかりでしょ?　祐樹のために今日朝早く起きて作ったんだよ」

なんとなんと、それは美代さんの手作り弁当なのでした!くそぅ、

うらやましいぞ祐樹君。
「有難く頂きます」
祐樹君は『よかった、これで今日売店で買う弁当代浮くぞ』などと邪な考えを持っていました。けど、純情乙女がそんなことを察するわけないよね（はぁと）。
「うん、ちゃんと全部食べてね。私はもう戻るから」
「ありがと」
じゃあね。手を振りながら、美代さんは駆けていきました。一度振り向かれたその顔は、心なしか赤くなっているようにも見えました。
はぁ、何やってんだ美代さん。胸ポケットの貞子さんは何を思うでしょう。
「祐樹、ほんとに誰なのよ、アイツは」
目に見えるかのような濃い怒気が浮かぶ貞子さんの問いに、祐樹くんはいつもの調子で答えます。
「だから、ただの幼馴染なんだって」
「何でただの幼馴染が弁当作って渡すのよ」
貞子さん、筆者がやるゲーム内では日常茶飯事ですよ。
「さぁ、何でだろうね」
「とにかく、アイツのお弁当食べちゃだめ！」
「じゃあ僕は何を食べればいいんだよ」
「弁当がなければ、お米を食べればいいじゃない」
筆者は松岡修三が大好きです。

筆者の日常ですが何か

さて、お昼休み。

半分の生徒は机でお弁当を広げ、半分の生徒は学食へと向かいます。この学校の学食設備は可もなく不可もなく、とにかくそういう設定なんだから描写を省いてもいいでしょ！ふんっ。

祐樹君は一人、弁当を持って屋上へと向かいました。普段誰も来ない屋上。一人で食べるには丁度良い場所です。そのまま昼寝に移行することも出来るので、弁当の時はいつもここに来ています。

一年校舎の屋上。上から見ると何も無いコンクリートの長方形型で、周りは……えっと、名前が出てこない。ガシャーンってなるやつだよ。えっと、フェ……フェ……。もういいや。フェ〇〇に囲まれています。

暑い夏だというのに屋上は少し風が強く、丁度良い涼しさを醸し出していました。うーん、弁当食べる前に眠ってしまいそう。けど五月蝿い蝉の声はどうしたらいいのでしょうか。

「むぅ～、やっぱりアイツのお弁当食べるのね」

祐樹君の胸ポケットに収まっている貞子さんが愚痴をこぼしました。

「だから気にするなって」

「うるさい、バカ」

困ったような苦笑いを浮かべながら、祐樹君は屋上のコンクリートの上で胡坐を掻きました。そこで黄色い布に包まれていた弁当を広げ、黙々と食べ始めました。

さすが美代さん。料理の腕もなかなかのものです。特に卵焼きなんか程よい甘味が加わって絶妙な味わいを引き出しています。直訳すると『美代さんの作った弁当はとても美味しいです』。

その時でした。

バーン。屋上への扉が開けられました。

「あ、やっぱりここにいた。祐樹、いっしょにお弁当食べよ」
な、なんとー、そこには美代さんが笑顔で立っていました。
彼女は祐樹君へと駆け寄りました。走る度に短い黒髪がサラサラ揺れます。
「何だ、二人分作ってたのか」
「祐樹と、あたしの分。それと、お弁当の味はどう？　おいしい？」
ワクワクしながら上目遣いで聞く美代さん。祐樹君は率直な感想を述べました。
「うん、おいしいよ」
「えへ、ありがと」
嬉々として頬を赤く染め、そしてニッコリ。破壊力抜群の笑顔。
「じゃ、あたしも食べよっと」
自分の分の弁当を広げました。祐樹君に作ったそれと何ら変わりはありません。ご飯とおかずがある、普通の弁当です。
二人は黙々と、お弁当を食べました。会話が無く、静寂に包まれた屋上。ただ風の音と蝉の声だけが響いていました。祐樹君は平気でも、美代さんはこの空気に耐えられませんでした。そして、勝負に出ました。
「ほら、アーンして」
なんと、自分のから揚げを箸で取り、祐樹君の口元へ運びました。そのままアーン。くそう、羨ましいぞ祐樹君。それなんてエロｇ（ｒｙ
刹那
「やめて！」
から揚げが祐樹君に食べられた時、屋上に少女の声が響きました。小さいながらも威厳のある、しかし可愛らしい声でした。ですが、今この場にいるのは祐樹君と美代さんだけです。ならば、この声は一体……？
勘の良い読者なら気付いたでしょう。そう、声の主は貞子さんなのでした。

祐樹君が自分以外の女――美代さんと仲良くしているのを見ると、貞子さんの心は痛みました。故、迷惑と分かっていながらも、遂に怒声を発しました。

しかし、色々とめんどくさいことになります。貞子さんの姿や声が美代さんにはわからないことをいいことに、祐樹君は貞子さんを無視し続けました。

ですが――

「もう、あんたなんか知らないんだからっ！」

貞子さんは胸ポケットから飛び立ち、地面に着地すると、階段の方へと駆けていきました。

「貞子さん！」

祐樹君は適当に箸を置き、慌てて後を追いました。

「祐樹、どうしたの！？」

美代さんは、ただそこに座り尽くしていました。始めはどうして彼が突然走り出したのか、皆目検討つきませんでしたが、次第にネガティブな考えが彼女を襲うようになりました。

「やっぱり、あたしの弁当なんて、食べられないのかな……」

泣き崩れ、そこにへたり込んでしまいました。目じりにキラリと光った涙はすぐに落ち、灼熱のコンクリートに吸収されていきました。

幽霊は銀刃に散る

「貞子さん、どこにいるの」
学年の廊下。祐樹君は叫びながら貞子さんを探していました。周囲からヘンな目で見られますが、この際そんなことに構ってられません。
学年廊下、図書館前、中庭など、怪しいところはくまなく探しました。しかし、あの小さい貞子さんを見つけ出すのは、容易ではありませんでした。
「貞子さん、どこだよ……」
午後の授業を放り出して貞子さんの捜索に当たった祐樹君。その努力虚しく、貞子さんは見つからずじまい。人が全くいない中庭のベンチに座っている彼は、一人嘆息を洩らしました。そんな祐樹君に、一人の女生徒が歩み寄りました。ベンチの後ろから少し距離を置いて、話しかけました。
「こんなトコにいたんだ」
祐樹君が振り返ると、そこには美しい黒髪を涼風に委ね、静かにたなびかせている美代さんがいました。いつもの元気は無い様子で、力弱く立っていました。背負っている鞄がいつもより重そうです。
「美代か……。さっきはごめんな。ただ――」
途中、美代さんが口を挟みました。
「何で、あたしのお弁当食べてくれなかったの？」
「ごめん、ちょっとした事情っていうか――」
「もしかして、祐樹の胸ポケットにいた幽霊のコト？」
えっ、それはどういうこと？
貞子さんが言うことが確かなら、普通の人に彼女の存在は見えません。しかし、目の前の美代さんは貞子さんの存在を、確かに言い当てていました。
「あの、幽霊？　何のコトかな」

とぼける祐樹君。シラを切り通す作戦です。
「あれ、幽霊なんでしょ。すっごい霊気感じたもん……」
どうやら全てお見通しのようです。しかし、どこか引っ掛かりがありました。貞子さん曰く、身体が小さくなった分霊力も小さくなった。すっごい霊気とは、どういう意味でしょうか。
「幽霊なんかより、あたしを好きになって？」
甘い声で、祐樹君に迫ります。
「美代……」
されるがまま、祐樹君の背中に手が回されます。
その時です。
「やめて、祐樹」
どこからか、声が。直後、変な感触から肩を見やると、そこに貞子さんが現れました。
「貞子さんっ！」
祐樹君が言うのと、貞子さんが涙を流したのは、同時でした。小さく泣く彼女の声が、祐樹君の耳に痛く響きました。
「寂しかったよ、祐樹」
小さな白い手で、涙を拭います。しかし、拭えど拭えど涙が枯れることはありません。祐樹君は貞子さんを自分の手に乗せ、彼女と向き合いました。
「ごめんね、貞子さん」
優しい彼の言葉に、貞子さんはまた泣き出してしまいました。今度は、祐樹君が彼女の涙を拭ってあげます。小指で、ちょこんと。貞子さんは急に顔を赤くし、祐樹君の胸ポケットへと侵入しました。
二人の様子を見て、美代さんが黙っているわけありません。背中に黒いオーラが出そうなほどの嫉妬や憎悪の念を、祐樹君に向けました。
「祐樹、あんた……」
美代さんは、ゆっくりと、祐樹君に歩み寄りました。
「祐樹は、全然分かってくれないね……」

切なげに言うと、突然、大粒の涙を流しました。儚い嗚咽がこぼれます。
「ずっと、あたしは祐樹のコトが好きだった。なのに、全然気付いてくれなくて……あたしの気持ちも、全然わからないでっ！」
強い怒気を見せる美代さんに、祐樹君は畏怖の恐怖を覚えました。
「ごめんな、美代の気持ちに気付いてやれなくて。ホントごめん……」
「今更、謝らないでよ」
突き放すように言った、直後――
「祐樹はあたしなんかより、その幽霊の方が大事なんでしょ……。だったら、皆死んじゃえばいいのよ！」
素早く、背負っていた鞄から銀に光る包丁を出しました。
「やめろっ、美代」
祐樹君の言葉虚しく、美代さんは右手の包丁を振り回しました。
「死ね！　みんな死んじゃえ！」
「バカっ、そんなの早くしまえ！」
「うるさいうるさいうるさい！　死ねぇっ！」
振り回される包丁から必死に逃げる祐樹君。ですが、やがてそれも限界に近付きます。祐樹君に突き出された包丁が、胸に直撃――
「貞子さん！」
されそうになるのを、胸ポケットから飛び出した貞子さんによって、止められました。しかし、それは自分の身体を呈した行為。貞子さんにとってはとても大きな銀色の魔鉄が、胴体に貫通しました。
「うっ、ぐっ……」
苦しそうなんていう次元ではありません。なにせ、自分の身体より大きな刃物が刺さったのです。貞子さんに流れる赤い血が、勢い良く噴き出しました。人間の血とは違い、それはすぐに地面のコンクリートに吸収されていきました。
「何で、何であんたが出てくるのよ！　泥棒猫に用は無いのよ！」
血塗れた包丁。修羅の表情でそれを引き抜こうとしますが、何故

か抜けません。
「貞子さん、何で……」
当然のように驚く祐樹君。貞子さんは不敵な笑みで美代さんへ言い放ちました。
「もう、この包丁は使えないわよ。あたしの身体の中で固めたから」
「くっ、幽霊が余計なことしてんじゃないわよ！」
しかし、貞子さんは残りの霊力を振り絞り、包丁もろとも空中におしとどまりました。ですが、それもいつまでも持続するわけではありません。
「祐樹、はやく、逃げて……」
「ダメだ、貞子さんっ！」
「無駄よ。あたしは、もうダメ」
痛さに顔を歪め、再び涙を流しはじめた貞子さん。しかし、それは痛みだけからくる涙ではないようです。
「ほんとはね、身体が小さくても人を呪い殺す霊力は十分にあったの」
「じゃあ、何で僕を呪い殺さなかったの？」
包丁に串刺しにされたまま、貞子さんは淡々と話し始めました。
「あたしを見て怖がらない人は、祐樹がはじめてだった。それで、コイツだけは殺したくないって思ったの……。幽霊であるあたしにも普通の人間と同じように接してくれて、祐樹のことが、好きになったの」
「貞子、さん」
いつしか、祐樹君も両の目に涙を湛えていました。貞子さんの、自分に対する愛を知り。いま、気持ちがはっきりしました。自分は、彼女に恋をしている、と。
「けど、あたしはもうダメ」
しかし――
「祐樹と出会えて、幸せでした……」
それだけ言うと、満面の笑みを浮かべて、貞子さんは消えていき

ました。
煙が舞い上がるかのように、貞子さんの姿は無くなりました。
カラン。包丁だけがコンクリートの地面に落ちましたが、美代さんはそれを拾おうとはしませんでした。
「祐樹のバカーーっ！！」
泣きながら、美代さんは走り去っていきました。
一人残された祐樹君。何も出来ないまま、ずっとその場に座り込んでいました。

幽霊は銀刃に散る（後書き）

次最終話です

エピローグ

一人の少年が制服を着込み、鞄を背負って暗い夜道を歩いていました。彼は高校の2年生で、恋に勉強に遊びに、そんな青春を人並みに全うしてきた人間です。それなりに楽しい毎日にも飽きてきた彼です。いつもとは違った刺激を欲しがってたりするのでした。

夏だというのに肌寒い風が頬を撫で、美しい満月が優しく彼を照らします。辺りに民家などはありません。小さな道路でした。

少年は携帯電話を開いていました。掌程に小さい携帯電話で動画などが見られるようになったご時勢、彼もその娯楽を楽しんでいました。

彼は、ある動画を探していました。呪いの動画です。

貞子さんのことが忘れられず、の行為です。

暫く探していると、少年が「おっ」と声をあげました。ついに見つけたようです。呪いの動画。

しかし、再生ボタンを押すと同時に画面を占領する『m9（^Д^）プギャー』の絵文字。今回もハズレのようです。

半笑いを浮かべて、携帯電話をしまう少年。すると――

『あんたのこと、絶対、絶対忘れてあげないんだから。いつかあんたを殺しに来るから、覚えておきなさい』

空耳が聞こえてきた、肌寒い夜なのでした。

~Fin~

エピローグ（後書き）

あー、よかった。無事完結。よければ一言でも評価残して下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4949f/

10cm

2010年10月8日14時56分発行